

東海道の整備と吉原宿の発展

江戸幕府は日本橋を起点として五街道の整備を行ったが、その一つが東海道である。家康は幕府の公用をこなすために宿駅で馬を乗り継ぐ「伝馬制度」を確立するため、各宿に対して「伝馬朱印状」と「伝馬定書」を交付した。「伝馬朱印状」は、これを携帯していない者に公用の伝馬を出すことを禁じたもの。また「伝馬定書」は常備すべき伝馬の数や伝馬への積載量などが記されたものである。1601年、家康は古代から交通の要衝であった吉原を宿場に指定した。

吉原宿は当初現在の鈴川～今井に置かれたが、たびたび風砂や高波などの自然災害にさらされた。そこで幕府は1639年ころに、吉原宿を依田橋村の西に移転した。しかしここも台風の高波によって全滅し、1680年に現在の吉原本町通りに移された。現在では、最初の吉原宿を「元吉原宿」、2番目を「中吉原宿」、3番目を「新吉原宿」と呼んでいる。



江戸時代

「東海道五拾三次之内 吉原 (左富士)」(市立博物館蔵)：

吉原宿が中吉原にあったとき、東海道を東から西へ行く途中、富士山が松並木の間から左手に見える場所があった



かりがね堤



かりがね堤と富士山



「東海道十六 五十三次之内 蒲原」(市立博物館蔵)

富士川はかつて洪水のたびに流路を変え、農民はしばしば水害に悩まされた。古郡重高は領地を洪水から守るため、1621年に富士川の治水工事に着手した。その遺志は子の重政に引き継がれ、苦勞の末に1640年に堤を完成させた。しかし1660年の大洪水で堤防は押し流される。重政は再度堤の構築に挑み、水害に負けない新たな築法を考案するが、志半ばで没した。それを引き継いだのは、子の重年であった。1674年、親子三代にわたる悲願が達成され、堤が完成した。全体の形が空を連なって飛ぶ雁の姿に似ているところから、「かりがね堤」と名づけられたと言われている。かりがね堤の完成により、加島5,000石と言われる水田地帯が作り出された。

また家康は角倉了以に命じ、富士川に舟運を開かせた。江戸中期には行き来する高瀬舟が300隻を超え、甲州との輸送が活発に行われた。



かりがね祭り：
かりがね堤建設時の人柱や富士川氾濫での犠牲者を弔うための祭り。毎年10月第1土曜日に行われる

幕末にロシア船が遭難

1854年、ロシアのプチャーチン提督が日本との条約締結を求めて、ディアナ号に乗って来航した。その交渉中の11月4日、東海地方にマグニチュード8.4という大地震が発生した。いわゆる安政の大地震である。下田港に入港していたディアナ号は大破し、修理のために戸田港への曳航中、暴風雨にさらされ沈没した。その際、田子浦地区の漁民らが、荒れ狂う海に小船で乗り出し、乗組員約500人全員を救助した。

ディアナ号の沈没を知った戸田の船大工と住民は、天城山の木材を利用して急遽船をつくり上げた。プチャーチンは住民に感謝して、この船の名前を“ヘダ号”と名づけ、帰国の途についた。この災難を越え、12月21日には下田の長楽寺で日露和親条約が締結された。

富士市ではディアナ号遭難救助から150周年を迎えるに当たり、2005年に日露友好を記念してさまざまな行事を開催した。



「ディアナ号遭難想像図」(市立博物館蔵)



平成6年、広見公園に建立された友好の像